

## 西田長男先生の「御講評」

天野信景の基礎的研究として最もすぐれたものと思う。

將來を期して「天野信景傳」をまとめられたい。また、ぽつぽつ小論文にまとめていつたらよいと思ふ。

やはり、研究は生涯續けていかななくてはなりません。神職として一流になるためにも、學者的側面を備えている必要がある。伊勢のようなドングリの背くらべのところでは、學問をすることが何よりも將來一流の神職となるためには必要です。人が遊んでゐるひまに勉強すること。貴君の將來を大いに希待する。<sup>(期)</sup>

西田

小

\* 本書を昭和五十一年、國學院大學文學部神道學科の卒業論文として提出した際、その末尾に記された西田先生自筆の「御講評」。

西田は指導教授・主査 西田長男博士(昭和五十六年卒)

小は副査 小笠原春夫講師(當時、東京農業大學教授)

## 序

私は昭和四十五年頃、二・三年、熱田神宮の神職養成所(熱田神宮學院)で教えたことがある。その中で一・二を争ふ優秀な生徒が本書の著者大鳥居(舊姓兒玉)武司宮司である。普通はそれで神職として奉務することになるのであるが、君は更に國學院大學の神道學科に進學、私の恩師である西田長男先生を指導教授とされた。即ち私とは兄弟弟子の間柄である(但、私は史學科であるにも拘はらず先生の學恩を辱くしたものであるが)。そして、この「天野信景の研究」を卒業論文として昭和五十一年、大學に提出された。

その卒業論文が如何に優れてゐるかは、西田先生の「御講評」(本書口繪參看)に充分盡されてゐる。卒業後、君は伊勢の神宮に奉職された。それが龜戸天神社の權禰宜に轉じられたことを知り、少々訝しく思つたことであつたが、それは東京に於ける名家大鳥居家に囑望されて聳に入つたことであつた由を知り、宜べなるかなと思つた次第であつた。

さて、數年前にその卒業論文の複寫を見せられた私は、印刷に附すことを強く薦めた。それは先生の「御講評」にあるが如く、充分世間の批判に耐へられると思つたからである。しかし、その時は逡巡された君であつたが、この程、龜戸天神社宮司拜命二十五年の記念として、これを印行したいとの申

出を受けた。喜ばしいことで印刷の仲介の勞をとらせて頂くことにした所、「序」を書いてほしいとの  
嚴命である。再三辭退したが聞入れられず、止むなくその経緯を記して、その責めを塞がせて頂くこ  
ととした。

本書が天野信景研究の唯一の專著として、ひろく江湖に迎へられむことを希望して擱筆すると云爾。

平成二十年一月五日

處 士 太 田 正 弘

# 目次

口 繪

西田先生「御講評」

天野信景肖像・墓碑

天野信景筆蹟

序

太田正弘

天野信景の研究

序 章 まえがき

第一章 天野信景研究小史

第二章 天野信景略傳

第三章 天野信景の著書

はじめに

第一節 一般著書（著述年代順）

第二節 隨筆 雜記

まとめ

付 録

目 次

一

四

二一

三二

三三

三四

一一四

一三八

一四一

## 細目

## 第一節 一般著書(著述年代順)

- (1) 熱田太神宮本社末社神体尊命記集説——34 (2) 伊勢參道里程抄——41 (3) 中臣祓管豹鈔——45 (4) 淫祀辨——46 (5) 參考尾張本國帳——47 (6) 初學讀書範——50 (7) 遊子説——53 (8) 岡上記——54 (9) 中臣祓祝詞本義——56 (10) 忠孝類説註——58 (11) 牛頭天王辨——58 (12) 神器授受略記——61 (13) 熱田神社問答雜錄——65 (14) 中臣祓講記——74 (15) 熊野考異——75 (16) 百人一首講義——76 (17) 參考本國神名帳集説——77 (18) 總社參詣記——84 (19) 尾張十大寺略——85 (20) 尾張古城志——86 (21) 南朝紹運圖——89 (22) 辨續神皇正統記 改正辨續神皇正統記——89 (23) 姓氏考——98 (24) 武業記——98 (25) 神祇祭祀略記——99 (26) 尾張國人物志略——103 (27) 大和國稱呼秘解——108 (28) 大日靈尊訓意秘訣——109 (29) 尾張國熱田大神緣起(熱田寬平記頭注)——109 (30) 神臂絶塵——111

## 第二節 隨筆 雜記

- (1) 鹽尻——114 (2) 信景隨筆——119 (3) 鹽尻拾遺——119 (4) 茅花隨筆——120 (5) 破窓謾筆——121 (6) 机上一覽——122 (7) 我聞如是——123 (8) 事言籍——123 (9) 戊寅冬記——124 (10) 尾陽舊談錄——125 (11) 天野信景備忘隨筆——126 (12) 天野氏集書——127 (13) 白華園隨筆——128 (14) 白華雜著——130 (15) 運甓隨筆——130 (16) 信景拾葉錄——130 (17) 今昔著聞集——131 (18) 眠唾雜史——133

(19) 天野信景藏古書殘篇 | 134  
(20) 尾張祠考 | 135

## 付 錄

- 一 天野信景著書名一覽 | 143
- 二 主要圖書館藏書一覽 | 158
- 三 『鹽尻』百卷本執筆年代 | 161
- 四 天野信景略年譜 | 164
- 五 天野家系圖 | 171

## 序章 まえがき

天野信景と『鹽尻』について五・六年前（昭和四十五年頃）までは全く無知であり、その名前すら耳にしたことは無かった。所が當時名古屋市熱田神宮内に有る、熱田神宮學院という神職養成所に在學中、或先輩より熱田神宮の歩射神事について調べて欲しいと依頼され、何も解らないまま資料數本を當つてゐるうち、『熱田祭奠年中行事抄』（昭和初期編輯、戦後謄寫版印刷、熱田神宮文庫藏）という資料を見つげ、その中に「鹽尻云」という書出しの文章をいくつか見たのである。それ以來その『鹽尻』という書名が何故か妙に頭から離れなかつた。

その頃『鹽尻』とはどんな本なのかと尋ねても餘り詳しく教えられることもなく、只近世の隨筆であるという程度であつた。偶々熱田神宮の社報『あつた』八十七號（昭和四十六年五月）に、當時熱田神宮文化研究員であつた太田正弘氏稿による『鹽尻』の寫本十三冊本の解説が載せられ、多少『鹽尻』についての知識を得ることが出來た。

以後益々信景と『鹽尻』に興味を覺えたが、別段特に時間を費して調べるでもなく、信景は範圍の廣い見識の高い人物であり、『鹽尻』も優れた書物であることに感心するのみで、上京進學後も『鹽尻』の被引用例の多いことに氣付く程度であつた。

しかし卒業論文の題目検討に當り最初に頭に浮んだのはやはり天野信景であつた。今にして思えば曾て在名の期間に多少なりとも調査しておけばと悔恨の情頻りである。

信景の傳記、學問及び著書等は從來然程詳かにされておらず、たゞ博覽強記の名を以つて雜學者、郷土學者として尾張地方の人々にはかなり廣く知られていたが、全國的にはそれ程際立つた存在ではなく、好學の士にその名を知られる程度である。

しかし、その博覽強記を以つて稱される所以は、神祇、國史、國典は固より、佛典、漢籍、儒教、和歌、國志、天文、動植物等に至るまで、あらゆるものに精通し、加えて本來の武士としての教養も高く、又「南朝正統論」を論ずる勤皇家でもあり、その著書は書名を挙げられるものが約百五十種もあること等からして當然とも言えるであろう。

彼の古典に準據した考證の態度も又彼を物語る上に重要な一面であり、同年代の吉見幸和と互に切磋琢磨しあい、門人たる『書紀集解』の著者河村秀根に影響を與える等、後世國學者の一人に數えられる所以であろう。又後の國學四大人と頌えられた宣長、篤胤等から高く評價されるに至り益々信景の存在を大ならしめることゝなつたのである。

そこで今回天野信景について調べるに當り本格的詳細な傳記、學問思想の變遷、師弟門人關係等、一つ一つ明らかにしなければならぬ譯であるが、餘りにも未開拓な部分が多く、餘りにも範圍が廣

い爲、到底我々の能く爲し得る處ではないので、此處ではその著書に的を絞り、寫本の解説等を通じて見たいと思う。多少なりとも後々研究の参考、手引きになるべきことを希う次第である。従つて論文と呼ぶより調査報告書と稱した方が適當かも知れない。

尙、調査、資料蒐集に當つては、元熱田神宮文化研究員で現在名古屋市教育委員會の太田正弘氏、現熱田神宮文化研究員である宮田清登氏の兩先輩に多大の御指導を賜わつたことを述べ謝意を表したい。

## あ　と　が　き

本書は巻頭に頂いた太田正弘氏の「序」に書かれているように、私が國學院大學に昭和五十一年に提出した卒業論文（主査西田長男教授、副査小笠原春夫講師）である。

今回、氏の強いお薦めにより宮司拜命二十五年（二十五は御祭神菅原道眞公に最も縁の深い數）の節目に、三十年も前のものではあるが、恥し乍ら舊稿をそのまま上木することとした。

顧みれば今日まで大過無く奉務して來られたことも、先達諸兄の御恩情の賜物と、深謝の念一入である。

曾て龜戸天神社への奉職に際し、筑紫・太宰府天滿宮での研修中、西高辻信貞前宮司が或日、私を自室に呼んで種々懇切なお言葉を掛けて頂いた。そして一言「氏子さんを大切にして下さいよ」と眞に慈眼とも言うべき眼指で話された様子は今も忘れ得ない。

そして信貞宮司は「邂逅」と言う言葉を殊の外、大切にされた。人々や全てのものとの出会い、巡り合い、これ程何物にも替え難い貴重なものは無いと。

私自身、今日まで多くの人と出会い、教えられ、輔けられ、育てられて來た。そしてその中でも取分け「熱田神宮學院」に於ける「太田正弘氏」「鹽尻」「天野信景」との出会い、更に西田先生の無邊

の師の恩、これが原點となつて、今日の自分が在ると確信している。

反面、反省しなければならぬ事も山の如くあるが、日々の奉務や雑事に追われることを口實に、無爲の日々を打過して來てしまつた。

先生の特段の御評を戴きながら、その中の「將來を期して天野信景傳をまとめよ」「研究は生涯續けよ」「神職としても學者的側面を備えよ」「人が遊んでいる間に勉強せよ」——これら何一つ果すことが出來ず、申し譯なく恥じ入るのみである。無論「今からでも遅くはない」とのお叱りの様子が目に浮かんで來る。

末尾にて失禮ながら、小論印刷に當り何の知識も持たない愚生を叱咤しつつも、憐憫の情を以つて全面的に御指導、御高配を下さつた太田正弘様に言の葉では盡せない感謝と御禮の意を呈し、自省と自戒を込めて、あながきとする。

平成二十年一月二十五日 初天神の日

大 鳥 居 武 司

昭和五十一年一月 執筆

平成二十年二月二十五日發行

著者兼  
發行者 大 鳥 居 武 司

東京都江東區龜戶三丁目六番一號